資料１－②

令和４年度地域包括支援センター事業評価（令和４年 11 月末時点）

印西市印西北部地域包括支援センター

| 事業ごとの評価と計画 | |
|---|---|
| 総合相談支援業務 | 訪問 225 件（前年度＋9 件）、来所 289 件（前年度＋112 件）、電話 446 件（前年度＋10 件）と昨年度より相談件数が増加した。<br>今後も地域に住む高齢者に関するさまざまな相談を受け止め、適切な機関・制度・サービスにつなぎ、継続的にフォローするとともに、必要に応じて地域包括支援センターの業務に継続していく。 |
| 権利擁護業務 | 虐待件数 12 件（前年度＋4 件）。<br>親が息子に対して、過干渉や過保護な関わりをした結果、子の精神面の成長の妨げとなったり、金銭を与え続けて労働意欲が低下するなどの「親子共依存」のケース相談が目立った。そのため、親子の距離感とるとった視点でのアプローチを試みた結果、別居したケースにおいては、親子間の関係性が改善した。 |
| 包括的・継続的ケアマネジメント業務 | 生活困窮により電気・ガス・水道の料金滞納など多様な生活課題を抱えている高齢者に対して、生活困窮自立支援事業を担っているいんざいワークライフサポートセンターと連携して、金銭の使い方を把握したり、生活習慣を見直しや借金返済に関する助言・指導といった包括的・継続的な支援を行った。 |
| 地域ケア会議推進事業 | 11 月末現在 個別会議 ２回、推進会議２回実施した。<br>北部圏域は高齢化率が 33%を超えているため、介護サービスだけでなく地域で支え合う仕組み作りが特に求められている。そのため今年度の推進会議は、民生委員・児童委員や支部社協など地域を支えくれる新たな担い手を掘り起こすことを目的に開催し、地域活動の具体的な取り組みを周知する為、助け合いカードを用いてグループワークを実施し、その地域活動に関心・興味を抱ける機会を設けた。 |
| 在宅医療・介護連携推進事業 | 医療と介護の両方を必要とする状態の高齢者が、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けることができるよう、地域における医療・介護の関係機関と連 |

| | |
|---|---|
| | 携して、包括的かつ継続的な在宅医療・介護を一体的に提供することができるよう、印西市と緊密に連携すると共に、地域の関係機関の連携体制の構築を推進する会議に参加した。 |
| 認知症施策推進事業 | 11 月末現在　認知症カフェを５回実施した。<br>今年度もレビー小体型認知症の当事者による講話を実施し、「トイレに入ると、４～5 人の人に囲まれる幻覚がみえる為、トイレ前に付き添い人に立ってもらい、誰も人が入らないようにしている」など当事者ならではの実体験談を語って頂き、当事者の状況の理解を深めることや認知症の普及啓発に努めた。 |
| 生活支援体制整備事業 | 今年度 総合福祉センターで第 2、第４火曜日 10 時～10 時 30 分「らくらくラジオ体操」の期間限定の講師として、オーラルフレイル・認知症予防を実施した。<br>また、小林地区の協議体と話し合いを重ね、砂田地区での集いの場作りの一環として、城山公園にて毎週土日曜日 ７時 30 分～から誰でもが自由に参加できる住民主体のラジオ体操を企画・開催した結果、毎回 20 名以上の参加している。 |
| 令和４年度事業中間評価（総括） | |
| 令和４年度もコロナ禍の収束が見通せない中、地域活動の多くが中止に追い込まれ、人との交流が 減っている状態が長期化していることから、高齢者の身体・認知機能の低下や社会的孤立が懸念された現状を考慮し、印西北部地域包括支援センターが主体となり、オーラルフレイル・認知症予防のミニ講座の定期開催や、認知症カフェの開催に努めた。<br>また、生活支援体制整備事業として生活支援コーディネーターが協議体と一緒に小林地区での活動や交流の場として、ラジオ体操を企画・定期開催を行うなど地域住民が主体となって、交流できる機会を設けた。<br>さらに、新たな担い手を掘り起こすことを目的とした地域ケア推進会議を開催して、地域で支え合う仕組み作りについて話し合う機会を設けた。 | |